

頸

湫

不整脈で動悸がする。

フツ——と止まった脈動が、一瞬の間をおいて再び力強く動き出す。青ざめた頬に熱い血潮が巡るのを感じると同時に、淡い多幸福感が全身を満たす。

ほんの少し溜息をつきながら、昔のことを思い返す。この心臓の鼓動と、熱い血潮の循環と、そして失神に恋焦がれるようになったきっかけを。

中学のころ、クラスで失神ゲームが流行った。

それはひどく暴力的で、幼稚かつ危険な遊びだった。対象者は壁に背を向けてかかんで、呼吸を意識的に荒くする。それから立ち上がり、深く息を吸って、背中を壁にびったりとくつつける。最後に、周りの二、三人が対象者の胸を渾身の力でもって押さえつける。すると、簡単にそいつを失神させることができる、というものだった。

手軽かつ刺激に満ちたこの愚かな遊びに、あつという間に僕を含めた男子の多くが虜になった。

その日はじゃんけんで負けたから、僕が対象者になった。何度か友人らの胸を押したことはあつても、自分が押されるのははじめてだった。当時は年相応にバカだったし、友人らへの手前、平静を装ってはいたが、心持ちは穏やかでなかった。

これまでの人生で、ただの一度も気を失ったことがなかったおかげで、失神がどんなものなのか、どういった気分になるものか、皆目見当もつかなかったからだ。

あまり目立たない二階の廊下の隅で、僕はかがみ込んで荒く、短く呼吸をはじめた。体育の短距離走を全力で走ったあとみたいに、深く激しく喘いだ。

しばらくの間そうした後、思い切り深呼吸して、肺にめいっばい空気を溜め込んで、勢いよく立ち上がった。軽く目眩がした。

友人の一人の、押すぞ、という声とともに、数人が力強く僕の胸を壁に押さえつけた。満杯の肺が圧迫されて、体は一気に悲鳴をあげた。

とても苦しかった。一瞬のうちに後悔して、止めてくれ、と言おうとしたが、胸にかかる力のせいで声は出なかった。

顔から血の気の引いていくのが、自分でもやけにはつきりと感ぜられた。視界にだんだんと黒い靄がかかって、意識がフワフワ浮かぶ感覚があった。

あ、これが「落ちる」ってやつか、となんとなく思っているうちに、僕は気を失っていた。

顔を叩かれているのと、名前を耳元で呼んでいるのがわかった。頸動脈の、ドク、ドクという激しい脈動を感じた。血液が運ぶ、痺れに似た心地よい淡い多幸福感が僕を満たしていた。震えを伴うような快感だった。

しばらくそんな感覚に浸っていた僕は、ろくに返事もしなかったから、友人らは本気でヤバイと思ったらしく、保健室に連れていかれた。

廊下で急に倒れたことにされた僕は、ベットに寝かせられた。親の迎えで早退するまで、僕はあの感覚を噛み締めるのに必死で、ずっと上の空だった。

次に登校したときには、クラスであんなに流行っていたはずの失神ゲームは、パタリと行われなくなっていた。それ以来、僕は失神とそれに伴う快感の虜になった。

自分だけでは胸を強く押さえつけることはできなかったから、なんとか失神できないものかと試行錯誤を繰り返すうちに、僕は頸動脈を締めると、あの時に近い感覚を味わえることに気がついた。

あれこれ試すうちに、お風呂の中で、湯船から立ち上がった瞬間に、頸動脈を締め付けると、強い目眩と一緒にあの痺れるような快感が得られるとわかった。

この方法を見つけた時には本当に嬉しくて、毎日のように繰り返ししたものだから、その度に風呂場で倒れて、体にたくさん痣をつけた。あんまり倒れるものだから、家族が心配したので、あまり利口でないこの方法を使うことはなくなった。

月日を経ても、例の快感は僕の心を捉えて止まなかった。その頃にはもう、何度も何度も繰り返し自分で頸動脈を締めるうちに、加減が分かりすぎるのが不満になってきていた。

どの程度で力で、どのくらいの間、血潮の流れを止めていけば気持ちよくなれるのか、自分で把握できているというのは、あまりに味気ないものだったからだ。

僕は日々妄想に耽った。細くたおやかな両の手が、ドクン、ドクンと脈打つ首に、そっと押し当てられる。はじめはごく自然に、軽く。そしてだんだんと、強く、力強く、僕を失神させようという、明確で濃厚な意思と、その白く細い腕の全力をもって遂行される。

もしそれが、愛する人によって行なわれるなら、なんと幸せなことだろうか。そんな甘い願望が脳を捉えてやまなかった。僕を骨の髄まで愛してくれて、殺すことすら厭わないような、そんな人に首を締められるならば、叶うならその手で扼殺されるならば、これ以上の幸福はないだろう、と。

また、いつもの不整脈で胸がグッと締めつけられる。血圧が下がって、意識が遠のくのがわかる。いつもの通りの症状だ。味気のない、寒々とした失神だ。

誰か、僕の首を絞めてはくれまいか。叶うならば、僕を愛してはくれまいか。殺してはくれまいか。